つむぎゆく短編集

夜々介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
つむぎゆく短編集

【Ｎコード】
Ｎ９５７８Ｐ

【作者名】
夜々介

【あらすじ】
嬉しくもない『つむぎゆく』の短編集です。本編のサイドストーリーだったり、全く違うＩＦの世界もあったりします。ぶっちゃけ『けいおん』関係ないんじゃないか。そんな予感がしています。そもそも『つむぎゆく』自体がもうなんか終わってる。　思いつき次第更新していく予定です。ある時を境に爆発的に更新されたりします。まぁ基本的に放置されます。それを許せる素敵な方、どうぞ時間ができた時にご覧ください。

sign of a tale（前書き）

制作時間2時間です。夜更かしして書きました。

どちらかと言うと本編のサイドストーリーになると思います。

sign of a tale

朝とも昼とも言えない時間に目を覚ます。休日じゃ珍しくもなんともない。
隣んちの主婦は当然フル活動中である。

洗面所で顔洗ったり歯を磨いたりをとっとと済ませ、いつものように朝食を探す。どうせ何もないだろうけどな。分かってるさ。
夕飯の残りも食パンも、生ゴミすらも……あった……。

……忘れてた。そういや俺がゴミ出しに行かなきゃいけないんだった……。
まぁ後でいいや。

適当に髪をセットし、サイフとケータイを持って家を出た。

もちろん着替えて。

さてさて、休日に一人で出かけることの多い俺だが、別に友達がいないからってわけじゃない事はお分かりいただけているだろう。
いや、どうだろうな。案外みんな俺が嫌いだったりしてな。
ありえない話じゃない。自分自身いい性格してないなって思ってるし。

そんな事はどうでもいい。

今日はちゃんと目的がある。某学校の軽音学部一行によって大幅な赤字を叩き出すハメになった楽器屋『１０ＧＩＡ』へ行くつもりだ。ってか、あの店名はなんて読むんだろうか……。そもそも何語だ？

よく知らないが、俺は『テンギア』と見たまんまの読み方をしている。

電車に揺られること約二十分、徒歩十分弱。繁華街へ向かう前に、俺はいつぞやのファーストフード店へと足を運んだ。

「いらっしゃいませ～！　ご注文はお決まりでしょうか？　今当店では期間限定で『ビックリビッグバーガー』というボリューム満点のハンバーガーを出しているのですが、いかがでしょうか？」

随分とクオリティの低いネーミングだな……。

そうだな、じゃあ……。

「ハンバーガー二つ、一つはセットで」

こっちの方が値段が安いし、パンも一枚得だ。

店員が軽く舌打ちをした気がするが、気にしない。そこまで店の売り上げを考えられるあなたは素晴らしいですよ。

嫌な客に対してでも業務用スマイルで振る舞う店員に感服しつつ、
トレーを持って窓際の席に座った。
隣の席で小さな子供がビックリビッグバーガーをいくつかに分けて
食っているところ、俺は悠々とハンバーガー一つにかぶりつく。
あの子供もいつかは気付くだろう。値段が高くて食いづらいビック
リビッグバーガーなんかよりも、ハンバーガー二つをのんびりと食
った方がはるかに得だと。
至って庶民的で悲しい考えだけどな。

ファーストフード店を後にした俺は、目的地である楽器屋に辿り着
いた。
……となるはずだったが、その一歩手前。

「あいたっ！」

の声と共に何かが後ろから俺にぶつかった。
後方の足下を見ると、小学校高学年か中学一年か、そんくらいの奴
が「いてて…」とかなんとか言っていた。
その小中学生は俺を見るなり、

「あ…、あぁスミマセン！！」

と叫んだ。若干俺に怯えているようにも見える。
まぁ、ガキってのは年上がみんな怖く見えるものだし、俺の顔が顔だしな。
変に笑顔を作るとかえって怖がられそうだし、俺は別にチンピラじゃないので、そのままの表情で、

「気にすんな」

と言って手を差し伸べる。
チキン小中学生は、もう一度「スミマセン」と言って立ち上がるが、すぐに倒れ込む。

「スミマセン、ちょっと足挫いちゃったみたいで……」

なんか面倒なことになったな……。

「とりあえず、もう一回立てるか？」

「はい、何とか……」

「歩けるか？」

足首少年は足を何回か地面を踏む。

「ちょっとキビシいかもです……」

「……ザコ」

「ええっ！？　す、スミマセン！！」

「冗談だよ。ホラ、乗れよ」
仕方ないからしゃがむ。
「スミマセン……」
「それ五回目。聞き飽きた」
「スイマセン……」
『m』取っても同じだろ。
「スンマセン……」
降ろして踏み潰してやろうか。

という訳で、変な少年を家まで送ることになってしまった。

「おい、ぶつかっただけで足挫くひ弱少年」
「え！　あ、はい？」
「家どこ？」
「えっと、二丁目の方です」

「言われても分からん」

「え！　じゃあなんで聞いたんですか！？」

「知るか」

「はあ……」

結局、俺の休日ってのは第三者によって潰れてくんだな。

「一つ、聞いていいですか？」とひ弱。

「なんだ？」

「高校生……ですか？」

「そうだけど？」

「そうですか」

何なんだ……。まぁ沈黙されるよりかマシだが。

「いや、すごく大人っぽく見えたので……」

「じゃあお前は何生？」

「一応中一ですけど……。やっぱり下に見えます？」

「まぁな」

「ですよね……。まだまだ背も低いし、声変わりとも無縁だし……」

興味ないな……。

ないんだが、年相応の切実な悩みなので、とりあえず聞いてやる。

「お前今身長いくつ？」

「え？　１５１．２センチですけど」

身長を気にしてる奴特有の小数点まで言う、がやはり発動。

「いいじゃねえか。俺なんか中一の時１５０なかったぞ」

「え、本当ですか？」

「まぁな」

「じゃあ俺もそのうち伸びるかな……あ、ここ左です」

「はいよ」

「本当にスミマセン、ちなみにあなたの家どこですか？」

「ここから十数分歩いたところにある駅から電車で二十分ほど揺られてさらに十数分歩いた先」

「えっ、メチャクチャ遠いじゃないですか！　なんかスミマセン」

すっかり謝り癖がついたな。こいつ。

「そういえば、桜が丘高校に通ってるんですか？」

会話が途切れ、しばらく沈黙が続いていたところ、残念少年が話しかけてきた。

「そうだけど、それが？」

「いや、俺の友達の姉ちゃんが桜高の生徒なんです」

「ふーん……」

「その人、軽音部に入ってドラムやってるって言ってました」

律かよ……。

ここで律登場かよ……。

「廃部寸前のところあたしの力で立て直したとも言ってました」

澪を無理やり引き連れ、紬を強引に勧誘し、唯を泣かせ……。

確かに、ある意味律の力によってかもな。

自然とため息が出る。

「どうしたんです？」

「いや、桜高軽音部のドラマーとは割と縁深でな」
「そうなんですか？　……ひょっとして、ピアノやってます？　あ、いや、違ってたらスミマセン」
「この流れで違ってたらつまんねえよな」
「え？」
「つまりは軽音部のキーボードの人ってこと」
「ホントですか！！？」
耳元で叫ぶな……。
「って事は、あなたが悠さんですね？」
「まぁな」
「一度会ってみたかったんですよ、律さんがよく分かんない人だって言ってたので」
あっそう。
「でも、思ってたよりもずっと優しくて頼りになりますね。悠さん、不利な立ち回り役になってるに違いありません！」
あっそう……。

「あ、そうだ。俺、森島翔っていいます。今さら紹介って変な感じですけど」

おぶっているので表情は全く分からないが、何とも嬉しそうな声色。

「それで足挫キックス」

「何ですかそれ。森島翔です」

「家はどこだ」

「……あ、スミマセン……」

二丁目の少年、しっかり頼むぜ……。

なんとか森島なる少年を家に送り届けることが出来た。

「今日はホントにスミマセンでした。ありがとうございます」

「まったく、いい迷惑だし」

「でも、こうして悠さんと会えたわけですし、一石二鳥です」

……何が？　俺としては一つの石を拾った後にもう一つ拾ってしま

った感覚だけどな。
「ちなみに、この通りをもうちょっと行くと澪さんちがありますよ」
「別にどうでもいいけどな」
「そうですか？　澪さん美人なのに」
「関係ねえだろ」
「……やっぱりよく分からない人ですね。悠さんって」
「お前はこの一瞬で何を悟った……」
「知るか……ですっ！」
あっそう。
「じゃあ、俺はこれで」
「ああ。じゃあな、ぶつかっただけで足挫くひ弱少年」
「森島翔です！　二度目ですよ、それ」
「まぁいいだろ。気をつけて帰れよ」
「と言っても数メートル歩けば俺んちですけど」
「まぁな」

「ぷっ」と森島なる少年だけが笑う。

「ちょっと！　ここは二人で笑い合う場面じゃないんですか！？
俺メチャクチャ恥ずかしいですよ！」

「生憎、全てのお約束に従うほどヒマじゃないんで」

「やっぱり悠さんよく分からない人です」

あ～疲れた。
人背負って何キロ歩いたよ……。
やっぱこまめに運動するべきだな……。

まだ昼過ぎか……。
今日は行くか、『１０ＧＩＡ』。

そういや、森島ってどっかで聞いたことある気がするな……。

まぁいいか。

sign of a tale（後書き）

何かの伏線です。

この先でうまく拾えるかどうかは謎ですが……。

ShadeBystander（前書き）

二作目です。どうぞ。

ShadeBystander

少女は一人の少年を見ていた。
特別関わったりはしない。
ただ見ているだけ。

少年は別の少女と一緒にいた。
その少女を少女Bと呼ぼう。
少女はそう思った。

少女はただただ見ていた。
見ているだけだった。
少年と少女Bは楽しそうに笑っている。

少女は見ていた。
混ざることだって出来るのに。
一緒に笑い合うことだって出来るのに。
しなかった。
少女はただ見ていた。
見ているだけだった。

私は思う。

なんでしなかったんだろう。
なんで声を掛けなかったんだろう。
どうして見ているだけだったんだろう。

少女は疑問を浮かべる。

私は思う。

あの時行けばよかったんだ。
あの時声を掛けていればよかったんだ。
勇気なんていらなかったはずなのに。

少女の疑問は後悔へと変わる。

少女は少年に振り向いて欲しかった。
少女は少年に気付いて欲しかった。
少女は見ているだけだった。

私は思う。

今度こそしよう。
今度こそ見ているだけなんてやめて。
今度こそ輪に入ろう。

今さら遅いかな……。

あの二人はすごく楽しそうだし……。

でも。

今からでも遅くないよね。
充分間に合うよね。

少女の疑問は後悔へと変わり。後悔は決意と変わる。
決意は不安に変わって。
不安は確かな決意に変化する。

だって。

こんなに近くに来てくれたんだから――。

April foolish（前書き）

何も考えずに書きました。

いろいろメチャクチャになってる気がします。

そして短いです。

読んでも何も得しない、つまらない話ですが、どうぞ。

April foolish

桜が丘高校入学式の少し前。

結局の所、いつも通りの日である。今は春休みなので、思う存分ダラダラしていた。

午後二時起床。
午後八時夕食。
午前三時就寝。

だいたいこんな感じの生活を送っていた。この時の俺はもちろん、軽音部に入部するなんて考えちゃいない。

しかし今は午前九時三十分。なぜか目が覚めた。目が覚めてしまった。
一時間くらいベッドに座ってボーっとしてたから、実際は八時半に起きた事になる。

そんな真っ白な時を過ごしていたら、ピンポーンなんて鳴りやがる。
……人が来た？

姉貴が出るだろうと思い、そのまま思考停止を続けていると、再び来客を知らせるチャイムが鳴った。

……姉貴いねぇの？

仕方ないので部屋を出て階段を下り、リビングにあるモニターで誰かを確認。お前か。

無視してやろうかと思ったが、呼び出し音がしつこく鳴るので玄関に向かう。そいつは「宅配便でーす！」なんて叫んでいる。俺はいろんな意味で「あーはいはい分かったよ……」と呟いた。

ドアを開けると、さっきモニターで確認した通りの人物――タカだった。

タカは「わっはっは」と耳障りな笑い声を上げ、

「残念だったな！　宅配便なんて嘘ぴょんだバーカ！！　今日は何の日だって話だ！」

……何の日？

曜日感覚も、日付感覚も、昼夜の感覚すらも完全におかしくなっている俺は、カレンダーを見ても今日が一体何月何日なのか自信が持てない。

ポケットに入れていたケータイで日付を確認。そういや、久しぶりにケータイ見たな……。

……四月一日か。

「で、何の用？」

俺はいまだ玄関で笑い続けるバカに訊ねる。

「何の用って、わざわざお前んちに来て嘘つきに来たんだが」

「なんで？」

「はぁ？　だって今日エイプリルフールじゃんよ？　なんか嘘ついてみたいじゃねえか」

あぁそうかい。

「つうかお前全然騙されてねえじゃん」

「朝っぱらから人生を無駄使いしてんじゃねえよ」

「そこまで言うか！　ちくしょう、ユウなら騙せると思ったのに！！」

その程度でか。

「用がすんだらとっとと帰れ。お前の相手してるヒマはない」

「どうせお前ヒマだろ？」

「ヒマだけど。お前の相手してるヒマはない。早く帰って来年に向けて嘘でも考えてろ」

「そんなに燃えてねえよ！」

タカは、「んだよ、つまんねー」とか「つれない奴だな」とか、「お前なんか一日間違えて嘘ついて恥かけ」とか言い残して帰っていった。

なんだったんだ……。

ふとケータイを見てみると、沙綾からも弘樹からも嘘メールが来ていた。沙綾のは転校するとかいう嘘だったので、逆に信じる作戦で気まずくさせてやった。弘樹のはなんかよく分かんない嘘だったので、「今日はエイプリルフールだな」と返してやった。

遅れて紬からのメールが俺の所に届いた。

『今日はエイプリルフールね。どんな嘘をつくか楽しみに待ってて』

これは俺に送らないで心の中で留めてほしかった。意味ねえじゃん。まぁ待つが。

自分の部屋に戻る時、階段で姉貴とすれ違った。姉貴は「あ、そうそう」と切り出し、

「存在を嘘ついて居留守使ったんだけど、悠人出てくれたのね。誰だった？」

いくらエイプリルフールでもついていい嘘と悪い嘘があると思うんだ、俺は。

「アホだった」と答え、俺は部屋に戻り再びベッドにもぐり込む。マジで眠い。いつもならまだ寝てる時間だ。

なんて言うか、みんなしょうもない嘘をつくんだな。俺は普段からしょっちゅう嘘をつくからエイプリルフールなんて気にしないのだ

が。

さてさて。もうすぐ高校の入学式なんだよな……。嬉しいような、そうでないような。
でも、これから通う桜高にはどんな奴がいるのか。少し楽しみなところだ。

まぁとりあえず。
それまで寝て待つとしよう。

Happening is Holly（前書き）

押してダメなら引いてみな！　それでもダメなら超能力さっ。

Happening is Holly

放課後、窓際が太陽で照らされただけの薄暗い資料室。

「あー、悠くん？」

「……なんすか」

「どうする？　これ」

「そうですね……、とりあえず絶望感に浸ってみます。柊さんは？」

「そうね、じゃあ私は窓の外でも眺めてようかなっ。結花はどうする？」

「私は……。どうしようかしら……」

短い会話をし、俺は壁に寄りかかって明かりのない蛍光灯を見つめ、柊さんは差し込む光をやるせない表情で迎え、黒峰さんはドアの前でだだ茫然と立ち尽くした。

しかし……、こりゃまいったな……。

――――――――――

チャイムが鳴る。

本日最後の授業が終わった事を告げる清らかな音色であり、福音である。

夏休みが明けてしばらく経ったが、まだセミは鳴いている。教室の壊れたエアコン――常温吐き出し機は休み中にちゃんと修理されたらしく、しっかり仕事をしている。

この涼しく快適な空間を名残惜しく思いつつも、俺はいつものように部活へ行こうとした。

が、

「朝倉、ちょっといいか？」

ダメだった。

俺を呼んだのは我が一年四組担任の吉田で、体育会系っぽい見た目に反して残念に膨れた腹を装備している。ただのオッサンだ。好きか嫌いかと問われたら嫌いとまでは言わないが、嫌だとは言うだろう。

「なんですか？」

「これを資料室に運んでおいてくれないか？」

「嫌です」

「えー」

渡されたのは五合炊き炊飯器くらいの大きさの箱。

「なんですか、これ」

「失敗作だ」

なんのだよ。

「頼むよ悠くん。先生はこれから職員会議ですぐ行かなきゃだから。資料室なら今実行委員が使ってたりなかったりするから、たぶん開いてる。じゃ、よろしく！」

担任はそれだけ言うと、とっとと教室から出て行った。てか悠くんやめろ。

あーあ。めんどくせぇな、なんで俺が。職員室行くついでに自分で持っていきゃいいじゃねえかクソボケが。

ブツブツ呟きながらもカバンを肩にかけ、謎の箱を持って教室を出た。世界が変わる瞬間である。暑……。

ちなみに紬は日直の仕事をせっせとこなしている。

廊下にもクーラーが欲しいのさ……なんて考えつつ、まぁ無理だろうとも思いつつ、その前に部室にエアコンを設置して下さいお願いしますという淡い希望を見出したところで、目的地の第二資料室にたどり着いた。

入り口には先客がいて、

「おー悠くん。悠くんもここに？　なんかの仕事かい？　私は桜高祭実行委員の仕事さぁ。まあいいや、ちょうどいいタイミングできたね、開けてくれ～」

柊さんだった。普段なら晴れ晴れしく透き通る声も暑さのせいか、力なく響く。

俺は箱を左脇に抱え、ドアノブをひねって足で開けた。

うわ、暑……。

この第二資料室は、南側に窓があって容赦なく日差しが降り注ぐ上に普段は締め切られているらしい。そのため室温がヤバい事になっている。

「こりゃ暑いわね……。窓、開けるか。さすがにおねえさんキツいわ」

柊さんは持っていた箱をとりあえず棚に置くと、窓を勢いよく開けた。しかし、嬉しくもなんともなかった。

「ザ・無風……」

「ですね……」

セミの鳴き声がやかましくなっただけであった。

こんな暑い部屋はさっさと出ようと決意し、俺は荷物を……うん、持ってけとしか言われてないからな、その辺に置いとけばいいだろ。

担任曰くの謎の失敗作を、ポツリと居座る机の上に置く。

「じゃあ俺、先に行きます」

「んー、またねー」

柊さんは荷物の整理か何かをやっているらしく、声だけを俺に届かせた。

ドアを開けて出て行こうと――あれ。

……あれ？

俺は違和感に気付いた。

「……先輩」

「どした？」

やはり柊さんは作業をしたまま。俺は事実だけを告げた。

「ドアが開きません」

体感時間的に五分後。

「ホントね……」

「鍵はかかってないし、ドアノブも普通に動きます。なんででしょう」

一応いろいろ試してみた。押したり引いたり、蹴ってみたり、「開け、ゴマ！」なんて言ってみたり、呪いの言葉を呟いてみたり――。

もちろんデタラメにガチャガチャしたりした。これだけやって開かなかったのだから、無理である。そもそも内側から鍵の操作ができるのに開かないのだから、まぁ、無理である。

「悠くん、そこらに針金とかない？」

「ピッキングでもやるつもりですか？」

「そうよー」

「……できるんすか」

「まあねー」

この人は何者であろうか。

「意味あるんですかね。鍵は開いてますし」

「物は試しよ。やってみなきゃ分からないじゃない」

ふぅ、と息を吐き、周りを見渡した。

「ていうか、鍵穴って外側じゃありません？　それにさっき俺、鍵は開いてるって言いましたよ？」

「……あ、やらかした……」

柊さんはバツが悪そうに笑う。

「ほら、アレよ。すごく暑いじゃない？　そりゃ思考だって鈍るわよ。それより、早いとこなんとかしないとっ」

よほど恥ずかしかったのか、柊さんは一人で話を進めていく。鍵のかかった机の引き出しを見つけ出し、奥から針金を拾ってくると、

「これを、こうやって……」

グニャグニャ曲げて何かの形を作り、うまい事鍵穴に差し込んだ。

「私ね――」

柊さんは手を動かしながら、語り始めた。

「昔から両親が共働きで帰りが遅いから、家に帰っても一人なのよね。私が一人っ子なのもあるし。もちろん合鍵は持ってるわよ。親が帰ってくるまでにご飯炊いたり……たまに夕飯の準備を全部やってるかな。それでね、確か小四くらいだったかな……たぶんそうね。ある時忘れちゃったのよ。鍵を。家に。すごい焦ってね、窓の鍵が開いてないかとか探したんだけど、そりゃ見つからないわよ。ランドセルの中も探したし、どこかに落ちてないかとかも見て回ったんだけど、ダメね」

淡々と話すその表情は笑顔のままだったが、どこか寂しそうな雰囲気を感じたのは俺の気のせいか。

「まぁ、途方に暮れるわよね。小学生だった私の行動力なんてちっぽけなもんだし。年相応にやんちゃだった程度よ、私なんて。ホラ、開いた」

「うわ、すげぇ」

柊さんは立ち上がり、さっきまでの空気を吹き飛ばすように笑った。

「で、針金が落ちてて、鍵いじくってみたら開いて家に入れたってわけっ！　ちょっとした武勇伝ねっ」

なんともコメントしがたい武勇伝だな。いい子なんだか悪い子なんだか……柊さん。たぶん、やればなんでもできちゃうようなタイプの人だな。なんとなくモヤモヤが残る感じがするが、気にしない方がいいんだろう。

「そんな事はどうでもよくて、悠くん、ケータイ」

「はい？」

「連絡っ。誰かにして。助けてくれ～って。私は荷物運びする時に結花に持ち物全部渡しちゃって今ないもん」

やはり暑さというのは思考を鈍らせるもんだ。俺はすぐに理解できなかった。

なるほど、連絡か。

確実に学校にいてヒマそうな奴を考えていくが、とっさに思いついたのが悲しくも軽音部の奴らだけだった。とりあえず紬に電話してみようと考え、ケータイを開く。あれ、電源切ってたっけ。

まずは電源ボタンを長押しし、次にボタンをいろいろ押し、最後にもう一度電源ボタンを長押しした。……はぁ。

「バッテリー死んでました」

そう言うと、柊さんは喜怒哀楽様々な表情を浮かべ、最終的にニコリと笑った。

「悠くん……えらいぞっ」

意味不明な事を言うもんだ。

「こういう展開になったら必ずこうする。お約束よっ」

ニコリと笑っている。それは紛れもない事実なのだが、得体の知れぬ恐怖が体を駆け巡った。

しかしそこから発展するでもなく、柊さんは小さくため息をつくと、

「にしても、どうしようかしらね。ていうか、外からは開くけど中から開かないドアってなんなのよっ。悠くん、ちょっと五文字で説明して」

「知りません」

「よろしい。そもそもなんで人の気配がないのよ。はい二十文字」

俺はぶつぶつ呟いた後、

「この部屋だけ異空間だからじゃないですか？」

柊さんは指を折りながら、

「このへやだけ……いくうかんは漢字に直すのね。で、最後にクエスチョンマーク、と……。よろしい。悠くん、頭の回転なかなかね」

「どうも」

そんな意味のないやり取りを意味もなく続けた。続けるしかなかった。

「暑いわね……」

「いい感じに蒸し上がりますね、これ……」

日もだんだん沈んできている。……気がする。この部屋の照明は全て全滅……じゃない、何言ってんだ。全滅していて、電気が付かない。なんだこの部屋。

「悠くん、窓から飛び下りてみる？　二階だから、死にはしないと思うわよ」

「さすがにその高さから下りたことないんで、遠慮したいです」

「窓を伝って行けるとこまで行ってみる」

「その後どうする気ですか」

「物は試しよ」

「アホですか」

「失敗は成功のもとって言うじゃない？」

「失敗したら取り返しのつかない事になりますよ。いっそドアを破ってみます？」

「この校舎は基本的に木造だけど、数年前に耐震工事したらしいし、強度は凄まじいからやめといた方がいいと思うわ。ごろにゃんするわよ」

「そんなかわいく甘えた感じになるんですか。じゃあどうします？
俺ちょっと腹立ってきました。このクソドア」

「実はこのドア、入る時は引くけど、出る時は左右のスライド式だったりして。

『いや、ありえないでしょう』

『分からないじゃない？　物は試しよ』

『……まぁ、一応やってみますけど』

俺はとりあえず入り口に向かう。無理だとは思うが、こんな状況だ、ワラでもなんでもつかんでやるさ。

ドアノブを握り、まずは右へ……マジか。

『柊さん……』

『……ホントだったみたいね』

開いたドアが妙に輝きを放っているように見える。

『なんか、感極まりますね』

『うん、すっごい呆気なかったけどねっ。でもこれで出られるわよ！』

『ですね』

俺と柊さんは知らずのうちに抱き合っていた。女子？　先輩？　知るか、そんなもん。こんなアホみたいに暑いわけの分かんない部屋から出られるし。

『じゃねっ、私は職員室に行ってここのドアの事言っておくわ。これじゃまた誰かやらかすわよ』

『よろしくお願いします。俺は部活行くんで』

柊さんと別れ、部室へ向かう。はぁ、なんかとんでもない体験したな……。

教室にかかっている時計をみると、担任から仕事を頼まれた時からそんなに時間が経っていない事が分かる。まぁ、そんなもんか。

ってかそうだよ、あのオッサンが荷物を資料室に運べとか言うからこんな事になったんだ。後で思いっ切り懲らしめてやりたいくらいだ。

はぁ……疲れた……。

……という夢をみたんだ」

「アホな事言わないでください。なんですかその展開。なんか妙にリアルだし。いやアンリアルか。スライドさせようとしても開きませんよ、ほら。てかなんで柊さんと会う以前の事知ってんすか。そもそもなんで俺視点なんですか。なに割と的確に俺の口調を真似てくるんすか。律儀にナレーションまで入れてどうするつもりですか。わざわざ区切りのいい終わらせ方してドヤ顔ですか、アホですか。暑いんでツッコませないでください」

ふぅ、とひと息。

「ツッコミ長いわね～」

「ボケも相当長かったじゃないっすか」

「ぶっちゃけた話、悠くんツッコミ苦手でしょ」

「まぁ……はい、そうですね」

「私もどっちかってとツッコミは苦手ね」

「はい」

会話が途切れ、セミが仕事をし始める。そして暑さを実感。

「はぁ……」

いらんハーモニーが狭い部屋に虚しく響く。

する事がないので、入り口のドアを開けようと試みる。……無理か。ため息が一つ増えただけだった。

今さらながらに気付いた事なのだが、ドアノブがやけに軽い。よく分からないが、故障……というか破壊によってドアノブが独立し、ひねると動く金属部分が動かないんじゃないか……でもそれだと回したら回しっぱなしになるか――なんてアホみたいに冷静に考えてみたが。俺としてはこのクソドアが開きさえすればいいので、理由なんかどうだっていいわけで。結局。もう嫌だ。

「あーもー！　なんなのよーっ」

柊さんは突然叫び出し、

「結花ぁ……来ーいっ！！」

「そんなんで来ますかね……」

「分かんない。どうにかテレパシーとか届かないかな。僕の声が…

…僕の想いが……君の胸に……っ。届けーっ！！」

壊れたか。

時間がどれくらい経過したか分からないが、確かにそろそろいい加減にして欲しい。出られない。電気も冷房もない。連絡手段もない。第二資料室は校舎の端の方にあり、人がほとんど通らない。校庭からも遠く、人が歩くことはまずない。どうしたものか。下手すると死ぬぞ、これ。

と、その時。

絶対に聞き間違いじゃない。遠くから足音が聞こえる。それはだんだん近づいてくる。まさか黒峰さんか。少なくとも、ただの通行人じゃない。俺の勝手な希望かもしれないが、そう思える。

足音はここの入り口をいったん通り過ぎ、遠ざかった。と思ったら再び近づき、おそらくドアの前で音がやんだ。

そして。

ドアがゆっくりと。

開けられていくドアの隙間は、なぜか輝いているように見える。なるほど、これが天国の入り口か。もしくは地獄の出口か。

軋んだ音を立てながらゆっくりと開いたドアから、一人の女子生徒の姿。それはまるで天使のようで。女神のようで。

大きなデパートで親とはぐれてしまった子がベソかきながら散々店内を歩き回り、迷子センターに預かられた数時間後にようやく親と再会できた。心情的にはこんな感じかもしれない。

それは麗しき黒峰さんだった。

「雪乃、呼んだ？　ってあれ、悠人くん？　二人ともどうしたの？」

なんか言葉も出てこないな。なるほど、こりゃ感極まるわ。

「……という夢をみたんだ」

「いやいや、柊さん帰ってきてください。ここは紛れもなく現実ですよ」

「……そうね。ていうか、結花なんで来たの？」

「え？　よく分からないけど、なんとなく呼ばれた気がして」

なんだこいつら。エスパーか。

「でも、実行委員の関係でここに用事があるって雪乃言ってたけど……あれ、私なんで来たんだろ……」

黒峰さんは後ろ手にドアを閉めながら言う。

「そんな事はもうどうでもいいのっ。……って、え」

……。

時が止まった。

やけに静かである。

さっきまでセミが鳴いてなかったか。

ていうか。

ドア、閉まったじゃん。

「え、なに？　どうしたの、二人とも」

まぁ当然だが、状況が分かってないのは黒峰さんだけである。よく分かっていない故に、キョトンとしつつも焦りが生じているようだ。

柊さんは静かに口を開く。

「……結花」

「えっ、はい」

「ここのドアちょっと壊れててね、外からは開くけど、中からは開かないのよ」

この静けさが少し怖い。

黒峰さんはドアを開けようと、押したり引いたり上下左右にスライドさせたりする。

「開かないわね……」

「そう、開かないの。だから、外からの助けが必要だったのね」
「でも私が入ってきて、閉めちゃったわけね」
「そういうことっ。つまり……どうしてくれるのよぉっ？」
「えっと……。あはは」
まぁ、黒峰さんは何も悪くないんだけどな。
「ばかぁぁぁっ！！」

Happening is Holly（後書き）

……という夢をみたんだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9578p/

つむぎゆく短編集

2011年10月8日10時13分発行